

[書評] 桜谷保之 著, 『自然観察のポイント』 159pp. 文
一総合出版 本体 2,000 円

竹田 真木生 (評)

本書の出版は 2017 年 4 月である。5 年前であるから新刊紹介というわけではないし、帯に書かれているように「生態系と生物多様性を 5 感でとらえる」ための良いフィールドガイドとなつて、既に普通に使われているのかもしれない。しかし、タイトルにあるように、生態系や生物多様性という対象は聞いて何となく理解できそうだが、実際に含まれている要素や対象の数と、時間や空間の広がりやを考えると、一つ一つの概念を正確に把握するのがむづかしい分野でもある。近年出版業界を賑わせている少年少女向きの図鑑類（これらもきれいな図を沢山載せて、コストパフォーマンスの高い出版物であるが）のレベルから、一段上の、これから科学的な認識、概念形成、実験科学へとつなげていく一連のプロセスの初期段階の教科書として価値が高いと考えるので、改めて紹介する。

自然史という分野は、ヨーロッパでは尊重されているが、日本ではそれに触れることを市民生活の喜び、とか財産に思うような文化はまだ発達していないように思う。過疎の農村が荒果てていくのを見るのは忍びないが、それでも、WWF や野鳥の会、各地の昆虫館、自然史博物館でエコ教育の実践を地道に続けておられる人々の努力は認識されなければいけないだろう。そういう語り部たちが子供たちの探求心、好奇心に火を点け、それをその子供たちが大人になってさらに次世代につないでいく時の道標になるようなそういうものがあつたら便利だろう。

今西錦司は、「生命というのは 2 通りの形がある。個体としての生命と、種としての生命が」といった。おそらくそれだけではなく、地域の固有の生態系という生命形態や、現在、生命科学は種などの分類群を踏破して、DNA レベルでの存在形態をも俎上に載せてきている。その状況は、共生や、シグナル伝達、エピジェネティクスなど、セントラルドグマだけではもうまにあわなくなっていることを示している。そうしたデテールに踏み込まなくても、生命の様々な階層の認識を子供たちに示しておくことは有意義であろう。サイズ、色彩、形とその変異、食物連鎖、隠れ家、餌の質と量、生物的な時間、季節、ストレスとそれに対する耐性など生活史を決める要因は様々あるが、それらに対する適応の多様性をオーケストラの様々な楽器の音色とそれが奏でる旋律線と伴奏、ハーモニー、リズムを一つの調和した作品として聞くことができるように、個々のパートをよく理解することが必要であろう。ここで少し学びの手立てがあれば理

解が早い。そのような目的のためにこの本は丁寧に書かれている。

著者の桜谷さんは、京都大学の昆虫学教室で私の 3 年上で、博士課程に在籍中で、私はそのとき農業研究施設というところで「トビイロウンカの配偶行動」というテーマで卒論研究をやっていた。その頃から、アリマキの研究をされている、どちらかという物静かな先輩として顔はよく記憶していた。私が神戸大学に在籍中の後期に近畿大の杉本毅先生（こどもとむしの会の結成時に理事）に招かれて非常勤講師をやっていたが、その時、桜谷さんは杉本研の助教授でおられた。アブラムシとそれを捕食するテントウムシを材料にされていたが、途中から里山保全などを研究する新しい研究室を立ち上げられた。近大には裏山に自然が残されており雑木林も保全されており、そこには野蚕の研究にはうってつけの場所があり、オオムラサキやオオタカはじめ鳥類も豊富であった。途中から三川合流（木津川、桂川、宇治川が合流して淀川になる地点で、河川敷の生態系がよく保存されている）のウマノスズクサにジャコウアゲハの他に外来の競争種（ホソオチョウ）との種間関係なども研究されていた。お生まれは宮城県で栃木でも学ばれ、奈良や大阪の里山で本書のタイトルにふさわしいフィールドの経験を積まれた。鳥、獣に植物にも造詣が深いし、石や月や星にも興味を示されている。

本書の構成は、多くのシンフォニーが持つ 4 部の起承転結のソナタ形式の構成になっている。サブタイトルは、「自然を捜そう よく見よう」、それを受けて「目の付け所を変えてみよう」、さらに「いろいろなシーンで観察しよう」で具体的なニッチェで様々な生物たちの凄さについて紹介され、そして「生き物の未来を考えよう」で結ぶ。ここでは外来種の評価や、絶滅危惧所の保護などについて書かれている。現在、私は佐用町の石井地区でコオロギ・ファームを営みながら里山保護や絶滅危惧種（タガメ、オオムラサキなど）の保全のためにバイオトープの構築を進めており、エノキ、ミズナラ、クヌギ、ハンノキ、カラスザンショウ等を植栽しているが、この本でも、これら虫が好み、いろいろな面白い活動を見せてくれるエノキや、クヌギの仲間、ハンノキ、カラスザンショウなどを取り上げてあって納得がいったが、それ以外にも多くの動植物の興味あるお話が紹介されていて勉強になった。佐用町も認定フィールド・ナビゲーター制でも作って、実際の動植物を現場で解説するためのエイドを設けるなりするとよいと思うが、その時にはこの本はきっと役に立つだろう。佐用町にはこの本に書かれていないようなミステリアスな分布を示す種があるのだから、知られないうちに絶滅してしまわないように少し手を打っておく必要があるのではないか。とにかく手に取って見ておかなければ話にならない。私たちの世代で

は、近所のおじさんや、博物館やそういうナビゲーターがいて、虫を捕まえたり、キノコや、山菜をとって食べたり、川でヤスを使って魚を捕まえたり、5寸釘で牡蠣をはがしたり、マムシやスズメバチをとって食べたり、どぜうを針につけてウナギをとったりしたものであるが、そういう人自体が絶滅危惧種になっている。都会では、ミカンの剥き方を知らない子供たちが増えているそうである。握りつぶしてジュースを吸うのだそうだ。こうした人材育成と文化の再興のために、できるだけ現在の知識と技術を残しておくための大事な手引きを本書は与えるだろう。

(Makio TAKEDA ピノキオ幼稚園 (熊谷市)
・昆虫資源研究所 (佐用町))